

# Chomsky 理論についての一考察

—Dharma 的視点からながめた場合—

田 中 泰 賢

Chomsky 理論についての一考察 (田中)

拙論は仏教的視点より変形生成文法を論じてみた。変形生成文法論者の合理的、論理的な科学としての言語理論が言語学のみならず他分野にまで大きい影響を及ぼしていきつつあることはすでによく知られている。ところがその変形生成文法の基本となっている考え方が、仏教の基本的な教説である〈縁起〉観（現代的に言えば相互依存）と非常によく対応している。彼等は機能的概念（Functional notions）、或いは関係的概念（relational notions）という用語を使って言語理論を築いているが、アメリカで起った変形生成文法理論の基本的な考察と仏教の〈縁起〉説が対応していると筆者は考える。その意味で変形生成文法論者の果たした役割は非常に今日的現状からみて、大きいと評価したいのである。

## 1

『西遊記』の中で孫悟空は自分の神通力を大変に自慢して、一度に何千万キロメートルも飛行が出来ると釈尊に嘯いた。そこで彼は釈尊の手から遠く離れて、飛んで行った筈であった。ところが、気が付いてみると、彼は依然として釈尊の手の中に居たので自分の傲慢さを恥じたといわれている。

私達はそのような〈手のひら〉にも等しい小さな世界に住みながら、資源は〈無限〉にあると錯覚し、空気や水も〈無限〉にあると過信してきた。そのためにあちこちに歪みが出てきたわけであるが、それはこの小さな世界が〈相互に依存した〉世界であることを無視してきたことにほかならない。

仏教ではそれを〈縁起〉という。あらゆるものが相互に依存しあい、わたしの存在があなたに影響をおよぼし、あなたの行動が他者を拘束してしまう。それが縁起の意味である。現代にあっては大自然そのものが狂いかけており、又社会と人間の関係も異質な関係になっている。言い換えれば〈言語〉も狂いかけてきている。何故ならば社会と人間の関係の鏡となっているのが〈言語〉であるからにはほかならない。したがって〈縁起〉という古き理法も、現代は現代なりに新しい意味づけがなされねばならない。

例えばその〈縁起〉の考え方に近いと思われるのに物理学がある。彼等によれば物質は原子から出来ているが、その原子は原子核とその外側を回る電子から成るといふ。又数学のトポロジーの基本的概念は連続の概念であり、ものの集まりということがらをあつかうといふ。まさにこういった考え方は〈相互依存〉の世界観に基づいており、仏教でいう〈縁起〉の思想と対応しているといわれている。

## 2

さて一方人文科学の立場から〈相互依存〉の世界観を論じた人達がいた。それはアメリカを中心にした〈変形生成文法〉論者達であった。Chomsky が Syntactic Structures を1957年に出版したが、その言語理論は従来の主流をなしていた通時的言語学や記述主義的言語学とは異なったものであった。Chomsky は更に Aspects of the Theory of Syntax を1965年に出版したが、それは〈標準理論〉と呼ばれた。その後には彼はそれを修正して〈拡大標準理論〉を発表し、又 Lakoff, McCawley, Postal, Ross らの〈生成意味論〉や、Fillmore を中心とした〈格文法〉もあらわれている。しかしこれらの理論に共通する points は、文法記述に変形規則が必要であり、意味に於いて生成的であり、言語の普遍性追求にある。

従来の言語学は資料中心主義、帰納主義、機械主義、形式主義に対して、Chomsky 達の理論は論理主義、演繹主義、精神主義、内容主義であった。彼は言語の表面の形式は内面の構造に深く根を付けてい

ると考えた。つまり言語表面の現象を正しく理解し、分析、記述するためにはその深いレベルを考えなければならないとしたのである。言語現象とその背後にある内面構造との〈相互依存〉性に注目して、その依存性を論じている。ここに仏教でいう〈縁起〉とそれはよく対応した考え方であるといえる。世界の本質を言語学の立場から〈相互依存〉性にに基づきながら科学的に論じているのである。

従来の伝統文法は多くのデータを用い、多くの用例を示したが、それらのはっきりした原理を与えることが出来なかった。従って明白な言語理論の性質を理解していなかったのである。しかし変形生成文法論者達は理解出来る構造と説明原理の発見を追究していた。

彼等の関心の的は現象ではなくて原理と説明であった。彼等はいちばん深層の諸原理と種々の認識体系の詳細な構造、それら認識体系の相互作用、そしてそれらが満している普遍的な諸条件を決定することを目的としている。Chomsky は次の様に論じている。

心理主義的な言語学 (mentalist linguistics) は資料として、言語運用 (linguistic performance) (あわせて、他の資料、たとえば、内省 (introspection) によって得られる資料) を用いて言語能力 (competence) を決定する理論言語学にはかならないのであり、(1).....

彼の Syntax 研究は心理主義的な言語学である。認知心理学の一分野としてそれぞれの認知体系を独自の構造をもつ個々の〈心的器官〉として研究していき、そうしてから、それらの相互作用の様態を研究していこうとしている。Russell も次の様に述べている。

スインタックスの研究によって世界の構造に関する注目すべき知識に到達出来ると信じているのである。(2)

心理主義的な言語学に基づく Syntax 研究は変形文法論者のみならず Russell によっても注目の的になっていたのである。そしてその Syntax の研究は世界の構造に関する知識に寄与出来る重要な課題であると認められていた。変形生成文法論者の唱える言語学は心理学の一分野であるといっても、従来の心理学とは必ずしも一致しない

ものであって、新しい認知心理学ともいえる。

仏教も又〈心理学〉という用語こそは使わなかったが、しかし〈心〉という問題には正面から取り組んで来た。その〈心〉を体系づけたものに大乘仏教の唯識論がある。唯識論は純粹に対象としてのものを見ようとする。〈心〉は諸現象の発生の原因の集まりであり、そこから諸現象が生起するところの根本原理（第八アーラヤ識）をさし、意は思量の意味で、思惟作用（第七マナ識）をさし、識は了別の意味で認識作用をさす。唯識では〈心〉を公式化して、人間は八識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識の五識と、第六の意識と第七のマナ識と第八のアーラヤ識）から成るとしている。これは人間の〈心〉への深い省察にほかならない。この〈心〉のしくみを知ることによって、〈心〉の本質、言い換えるならば世界の構造を知ることが出来る。唯識では〈心〉を〈心王〉と〈心所有法〉との二に分ける。〈心王〉は〈心の主体〉の面、〈心所有法〉は〈心の心理作用〉の面である。この〈心所有法〉は〈心理分析〉であり、人間の〈心〉の実態を細かに分析していく。太田久紀氏（『大法輪』第48巻、第9号、S.56）によると、唯識の〈心所有法〉は〈六位五十一の心所〉論に分類出来るという。

唯識は現代的に言えば〈心〉を表層構造と深層構造に分けて、細かく分析している。唯識は、人間の認識と染汚性への深い省察を行なっている。諸現象が生起するところの根本原理、アーラヤ識とマナ識と意識と五識は相互に依存している——関連しあっている——というのである。このように仏教も心理学的であり、又変形生成文法論者もそうであり、共に表層構造と深層構造という分析を行ない、しかもその両者が〈相互依存〉性に基づいている点で一致する。

### 3

Lepie は *Emptiness and Western Philosophy of Language* という論文で、仏教と西洋哲学の両者を比較して論じている。その中で彼はこのように言っている。

Words are, I maintain, dependent

on other words for meaning.  
 This is as well my understanding  
 of more recent work in linguistics  
 by proponents of transformational  
 grammar theory. Fodor and Katz  
 propose that ambiguities in a word's  
 reference are to be understood  
 not by the consideration of the  
 total context of a statement's  
 utterance (including the objects)  
 but only the linguistic context,  
 the preceding sentence.<sup>(3)</sup>

語(文)は相互に依存している。そのことは変形文法論者の研究からもうかがえると、Fodor と Katz の例を引いて述べている。

Lepie は Chomsky (1966), Fodor and J. Katz (1964), Whorf (1956), Wittgenstein (1964) 等の諸論文を参照しながら、仏教、特に〈縁起〉観から発展していったところの〈空〉の論理をみている。

そして彼は仏教の〈合理〉的な〈縁起〉観、〈相互依存〉性は変形文法論者の中にもみられるとしているのである。

歴史文法から誕生した言語学が自律的な学問として成立した背景には、言語においてはすべてが依存し合い、依存し合った体系という考え方があった。しかし変形生成文法が登場するまでは、その考え方はまだ具体的な言語理論として確立していなかった。変形生成文法論者の考え方は、最初は無視されていたが、次第に、彼等の科学的な論及は大きな影響をもつにいたり、終に言語学を変革するまでになった。それもやはり〈相互依存〉の合理的な理論形成によるものであった。Chomsky は次の様に述べている。

「主語」(“Subject”) という概念は、文法範ちゅう (grammatical category) というより、むしろ文法的機能 (grammatical function) を示すものである。それは、言い替え

れば、本質的に、関係的な概念 (relational notion) である。(4)

今までの言語学者が問題にしていなかったところの機能と構造との依存関係を追究していった。文法的機能は変形文法の第一部門。〈分枝規則〉 (branching rules), 〈構成要素構造規則〉 (constituent structure rules), 〈拡大規則〉 (expansion rules), 〈句構造規則〉 (phrase-structure rules) といわれるものを含む基底部門によって生成された標示つき分枝図によって規定される。基底部門は、文の表層下にある抽象構造を生成する。いわゆる深層構造といわれるもので、文の意味解釈に必要なあらゆる統語論的情報をもっているという。彼は又次の様に論じている。

現代の述語でいえば、こういう見解を、言語の統辞法を二つの規則体系を用いて記述することによって形式化することができよう。深層構造を生成する基底部体系 base system と、これらを表層構造へ写像する変形体系 transformational system とである。基底体系は、抽象的順序をもって基底にある文法関係を生成する規則 (句構造文法の書換え規則) から成立し、変形体系は消去, 配置変更, 附加などの規則から成立する。(5)

彼は言語構造と心理過程との研究に注意を向けていった。Lepie も言っている如く、相互依存性に基づく考え方から、生成的, 循環的な言語活動に光があてられる。言語現象の精密な観察とするどい洞察とが、人間の〈心〉の理解に通じ、人間の〈心〉の反映として、言語の普遍性が仮定され、この普遍性が人間の心に生得に備わっているからこそ、どの人間もことごとく言語を習得することが可能であり、又〈心〉は自由であるからこそ、人間は言語において有限の手段を用いながら創造的でありうる。

## 4

〈縁起〉論は仏教の基本的な教説で重要なものである。現象的存在

が相互に依存しあって生じていることを意味する。理論的には、恒久的な実体的存在が一つとしてありえないことを示し、実践的には、この因果関係を明らかにし、原因や条件を取り除くことによって現象世界(苦しみの世界)から解放されることをめざす。

釈尊は四つの基本命題を立てている。

- a. 此<sup>これ</sup>あれば彼あり。
- b. 此生ずれば彼生ず。
- c. 此なければ彼なし。
- d. 此滅すれば彼滅す。

この四つが縁起思想の基本である。aとbはまず肯定的な側面を述べ、cとdにおいては、否定的な側面が述べられている。

aとcは空間的、論理的な相互依存関係について述べたものであり、bとdは時間的な因果関係について述べたものである。だから<縁起>とは、空間的・論理的相互依存関係と時間的因果関係の二つを含んでいる。

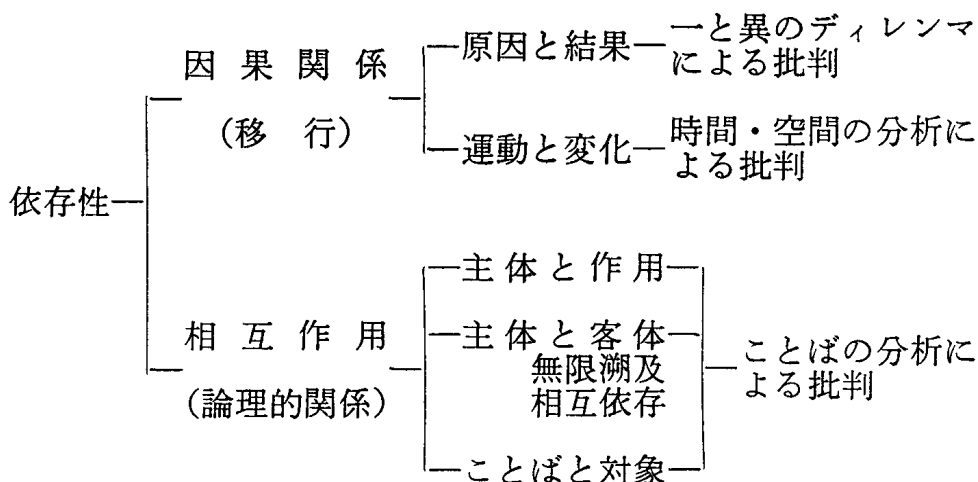
空間的・論理的相互関係依存関係とは、すなわち孤立した存在は存在しないということである。時間的因果関係とは、ものごとには、必ず原因があって結果があることを意味する。

龍樹(梵 Nāgārjuna, 二~三世紀頃の人)は大乗仏教思想の哲学的理論づけをはじめて行なった人である。彼はこう述べている。

(相互に)依存して存在するということは相互に成立させ合うという意味でそれは自立的存在ではない。<sup>(6)</sup>

<依存性>は原語では pratitya-samutpāda である。原理の意味は、ものが原因、条件によって生じること、即ち因果関係をさす。そしてこの因果関係は時間的な因果関係の軸と、論理的な相対関係の空間的な因果関係の軸の両者を含めた依存性一般を意味することは上で述べた。

梶山雄一氏は次の様に図式化している。<sup>(7)</sup>



龍樹が二つのものの関係を最終的には二つの対立概念の相互依存性に還元したのは、それぞれの概念が自立的に存在する本体をもたないということを知らせるためであった。たとえば種から芽が出るというときに、もし種というものが種という有として変化し得ないものであるならば、種が芽になるということは出来なくなる。また芽といわれても、いつまでも芽であるわけではなく、それが葉になり実になる。そういうふうに生成や変形があるのは、芽が芽という本体を持っていないからである。

龍樹は主体と客体は依存関係によって成立すると述べている。しかし依存関係によって生じる存在はすべて実体が空であるとしている。つまり名称であらわされる事物はすべて涅槃と同じく実体が空である。存在はすべて実体が空であるから、存在の依存関係による生起が問題となったのである。かれ (A) との依存関係からこれ (B) が生じるのであって、この世間の道理を否定しているのではない。依存関係から生じるものは実体がないから、そのものがどうして存在しようか。それが (ないことは) 明白である。

龍樹は言語習慣の真理 (言説諦) を承認しないで、すなわち言語習慣の真理を無視してしまって、〈すべてが空である〉とは言わない。言語習慣の真理に従わないで教法を説くわけにはいかないからである。言語習慣を用いないでは、最高の真実は説きえない。

ものが空であるということは、そのものが本体として存在するので



はなくて、原因や他のものによって生じてきているということである。もし原因が結果と区別された本体をもち、行為とその主体と対象がそれぞれ区別された本体をもっているならば、どうして原因が結果になり、人があるものにはたらきかけるということができるのか。生成や変形は、ものが空、即ち相互依存性、ということの上になりたっているのであるから、空性、即ち相互依存性を否定するものにはすべての生成や変形はなりたないということになる。

Chomsky 達の母語および普遍的な生得的言語能力と、創造性をキーワードとするところの変形文法或いは生成文法は上で述べた相互依存性に基づくことがはっきりしてきたのである。Wienpahl は次の様に言う。

I see as the basic feature common to the work of the Ch'an Buddhist and Wittgenstein a "problem", or the attempt in the work of each to attain to non-dualism, that is, a way of looking at as well as behaving toward things in which there is room for both mental and physical actions without the two being taken or treated as really different from each other.

.....The move to non-dualism, then, is a move toward wholeness, which is on the way to union.<sup>(8)</sup>

Wienpahl は仏法と Wittgenstein を比較して論じている。その中で両者が共に<non-dualism>に達しようとしていることである。そしてその<non-dualism>は<wholeness> (普遍性)につながるという。その<non-dualism>は相互依存性という考え方からもたらされる。相互に依存してのみ、自体を得るから認識方法といっても二相をもち、認識対象も二相あるものとなる。認識方法と認識対象との二つは混じり合っていて区別出来ない。そのように相互依存性から普遍性という考えが生じてくるのである。

Chomsky もこう言っている。ウィットゲンシュタイン同様、「椅子」という語を世界についての確信から切り離して特徴

づけることができるとは思わない。すなわち意味表示においてはすべてが作用し合っているのだ。(9)

又越沢浩氏は Wittgenstein についての次の様に語る。

言語の本質および言語と世界との関係が Wittgenstein によって終生重要な哲学的問題となるのである。(10)

このように仏教も、Chomsky も Wittgenstein も相互依存性に基づき普遍的原理を共に等しく追究しているのである。

## 5

(1) I persuaded John to leave.

(2) I expected John to leave.

Chomsky は上の二つの文が構造上平行的でないことを次のように分析している。まず次の文を考える。

(3)(i) I persuaded a specialist to examine John.

(ii) I persuaded John to be examined by a specialist.

(4)(i) I expected a specialist to examine John.

(ii) I expected John to be examined by a specialist.

(4i) および (4ii) という文は<知的同義性をもつ>。つまり、一方は、他方が真ならば、そして真である場合にかぎり真である。この考え方は(相互依存性)に基づいてなされていることがわかる。しかし(3i)と(3ii)の間には、どんな種類の弱いパラフレーズ関係(相互依存性)でさえ見られない。したがって(3i)は、(3ii)の真偽とはまったく無関係に、真あるいは偽でありうる。(4i)と(4ii)の間には、どのような、内包(connotation)、<主題>("topic"), 強調(emphasis)の相異があっても、それは、まさに、"a specialist will examine John"という能動文と、"John will be examined by a specialist"という受動文との間に見られる相異である。しかし、このことは、(3)についてはまったくあてはまらない。事実(1)と(3ii)の根底にある深層構造は、"John"が埋め込まれた文の文法的主語であると同時に、動詞句の直接目的語であること

を示さなければならない。さらに、(3ii)において、“John”は埋め込まれた文の論理的直接目的語であるが、(3i)においては、“a specialist”という句が動詞句の直接目的語であり、埋め込まれた文の論理的主語である。

しかし、(2), (4i), および (4ii) においては、名詞句 “John”, と “a specialist” および “John” は、それぞれ、埋め込まれた文の内部で持つ文法的機能以外には、なんら文法的機能を持たない。つまり、“John”は、(4)の埋め込まれた文〔複〕において、論理的直接目的語であり、“a specialist”は、そこで論理的主語である。したがって、(3i), (3ii), (4i), および (4ii) の根底にある深層構造は、それぞれ次のものである。

(5)(i) Noun Phrase—Verb—Noun Phrase—Sentence  
(I—persuaded—a specialist—a specialist will examine John)

(ii) Noun Phrase—Verb—Noun Phrase—Sentence  
(I—persuaded—John—a specialist will examine John)

(6)(i) Noun Phrase—Verb—Sentence  
(I—expected—a specialist will examine John)

(ii) Noun Phrase—Verb—Sentence  
(I—expected—a specialist will examine John)

(5ii), (6ii) の場合には、受動変形が、埋め込まれた文に適用され、さらに四つのすべての場合に、他の必要な操作が加わって、(3), (4)という最終的な表面形式が得られることになる。ここで重要なことは、(4i)と(4ii)とは根底にある構造が、本質的には、同じであるが、(3i)と(3ii)の場合は異なるということである。(1)と(2)は、表面構造は同じであるが、その根底にあって意味解釈を決定する深層構造においては、非常に異なっている。このような分析の仕方も深層構造と表層構造という相互依存性に基づいた立場から論が展開されているのを見ることが出来る。そしてその相互依存性を具体的に明示しているのが分枝図である。

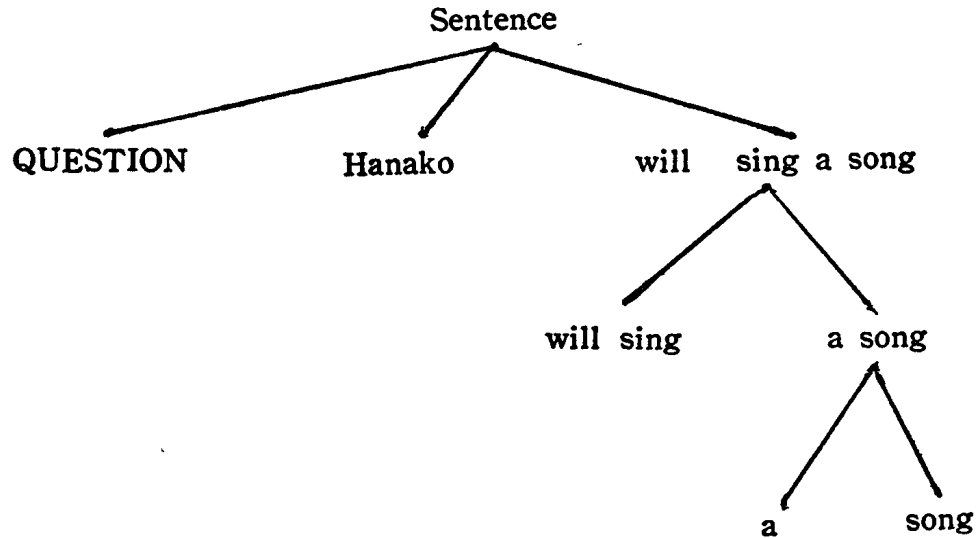
次の文を見てみよう。

(1) Hanako will sing a song.

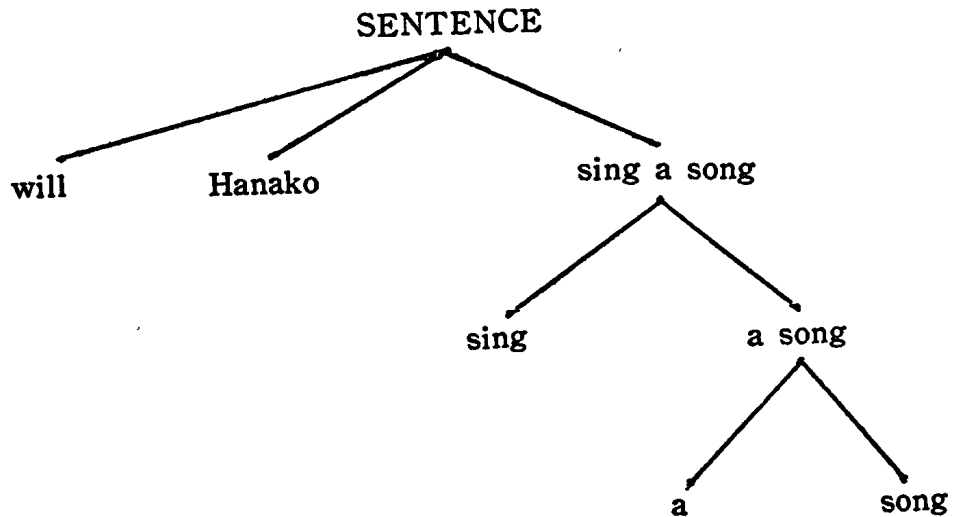
(1)の文を疑問文にすると,

(2) Will Hanako sing a song?

(2)の深層構造は下記の分枝図を持っているという。



“QUESTION” は、この句構造が疑問変形を適用しなければならない深層句構造であることを意味する。変形は深層句構造を表層句構造に変えるから(2)の表層構造は次の如くである。



このように分枝図は相互依存性を単的に明示している。変形生成文法の表層構造と深層構造との関連性、或いは分枝図でみる相互の関連性は相互依性に基づいた考え方から来ているのである。

## 結 語

仏教の視点を通して変形生成文法について論及してみた。仏教の基本とする〈縁起〉、つまり相互依存性が、現代という時代にふさわしい形で、変形生成論者によって語られ、それが言語学の分野にとどまらず、ひろく他の分野にまで影響を与えている。彼等の行なった業績は多大なものであり、更に今後一層の発展が期待される。

Chomsky 理論とその一考察 (田中)

### 註

- (1) Noam Chomsky, 1965, *ASPECTS OF THE THEORY OF SYNTAX*. M.I.T.  
安井稔訳『文法理論の諸相』(研究社, 1973) p. 227
- (2) Bertrand Russell, 1956, *An Inquiry into Meaning and Truth*, George Allen & Unwin Ltd.  
拙訳。「広島電機大学研究報告」第5巻. p. 221
- (3) Lepie J, *Emptiness and Western Philosophy of Language*, unpublished. pp. 11-12.
- (4) Chomsky, op, cit., p. 80.
- (5) Noam Chomsky, 1966, *Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought*, Harper & Row.  
川本茂雄訳『デカルト派言語学』(テック, 1970) p. 55
- (6) 梶山雄一・瓜生津隆真訳『大乘仏典14龍樹論集』(中央公論社, 1974) p. 188
- (7) 梶山雄一・上山春平『仏教の思想3 空の論理〈中観〉』(角川書店, 1981) p. 76
- (8) Wienpahl P, 1979, *Eastern Buddhism and Wittgenstein's philosophical Investigations*. (Eastern Buddhist, Vol. xii, No. 2)
- (9) Noam Chomsky, 1977, *Dialogue avec Mitsou Ronat*, Flammarion.  
三宅穂嘉・今井邦彦・矢野正俊訳『チョムスキーとの対話』(大修館, 1980). p. 205
- (10) 越沢浩, 1978. 「ウィットゲンシュタインと言語の写像理論」(『言語文化』No.15, 一橋大学) p. 44